

地域日本語教育における各分野の専門家と日本語教師との協働 —外国人生活者向けケアプラン日本語教室の企画・教材作成・実施を例に—

俵 山 雄 司・渡 部 真由美・結 城 恵

要 旨

近年の地域日本語教育では、各分野の専門家と日本語教師との連携・協働により地域で暮らすための様々な情報の共有が図られている。一方で、そのような協働における役割分担の詳細の記述や役割分担の在り方についての研究は少ない。本稿では、筆者たちが実施した「定住を希望する外国人生活者向けケアプラン日本語教室」について、各分野の専門家と日本語教師の協働という観点から記述・分析する。また、そこから、企画・教材作成・実施の各局面での効果的な役割分担について考察する。

【キーワード】 地域日本語教育、専門家、協働、健康維持、介護

1. 本稿の目的

近年、地域の日本語教育では、従来から見られた言語の習得を主眼とした形態以外に、対話による相互理解や地域で暮らすための様々な情報の共有など必ずしも言語の習得にこだわらない形態が増加している。平成19年度より実施されている文化庁『『生活者としての外国人』のための日本語教育事業』の報告書を見ても、その多様さの一端がうかがわれる。

なかでも、防災やゴミといった地域の生活情報の共有の際には、日本語教室の運営側が、市役所や消防署などの関係機関から情報提供や助言を受けたり、講師を派遣してもらったりするなど、各分野の専門知識や経験を持つ専門家との連携・協働が行われている。

しかしながら、そのような専門家と日本語教師（日本語教育の専門家を含む）との協働について記述した報告は数が少なく、また、協働における役割分担など詳細に踏み込んだ研究は見られない。本稿では、筆者たちが実施した「定住を希望する外国人生活者向けケアプラン日本語教室」について、地域の日本語教育における各分野の専門家（以下、「専門家」と略す）と日本語教師の協働という観点から記述・分析する。また、そこから、企画・教材作成・実施の各局面で、どのような役割分担が効果的なのかを考察する。

2. 先行研究

地域日本語教育における専門家と日本語教育関係者との協働についての報告としては北村（2014）がある。ここでは、名古屋大学が豊田市の委託を受けて構築した「とよた日本語学習支援システム」で実施された外国人住民向けの医療・防災・ごみなどの講座について概略が述べられている。講座の講師は豊田市の関係機関からの派遣で、講座の内容・資料・話し方については日本語教師と関係機関が連携して考えたとされている。

これ以外で、専門家と日本語教師の協働について扱っている研究には、大学における実践を扱った五味（1996）と大島（2004）、専門的研修における実践を扱った亀井・浜口（2007）がある。五味（1996）は、理工系大学において専門教員と日本語教員とが創設した大学院科目「科学技術日本語」における協働について報告している。役割分担については、講義用のハンドアウト執筆や専門用語のリストアップは専門教員で、講義については専門教員と日本語教員が交互に行ったとなっている。しかし、日本語教員独自の役割については特に記載がなく、協働の全体像は示されていない。大島（2004）は、大学初年時科目としてのレポート・スピーチ指導のクラスにおける日本語教員と理系専門教員の言語行動面での役割分担について分析している。企画や教材作成については特に言及されていないが、実施に関しては各回の授業内での流れに沿って、それぞれの役割が以下のようにまとめられている。

その日の学習項目の説明（言語教員）→その学習項目が今後の大学生活でどう役立つか、動機づけ（専門教員）→学習項目に関する細かい説明（言語教員）→課題の取り組み方の説明（言語教員）→課題取組中の学習者に対する机間指導とコメント、グループワークの手助け（言語教員・専門教員）→フィードバック、宿題の説明（言語教員）

次に、亀井・浜口（2007）であるが、これは、国際交流基金関西センターで行われている、海外図書館に勤務している業務上日本語が必要な図書館員に対する研修について報告したものである。この研修では日本語能力の向上とともに、日本の図書館事情の理解も目標としているため、日本語教育専門員（日本語講義に加え、調査・研究活動などを行う職）がセンター内の司書と協働して専門科目「図書館事情」を運営しているという。ここでは、以下の表が挙げられ、両者の役割分担が示されている。

表1 司書と日本語教育専門員の協働内容（亀井・浜口2007）

	授 業 実 施	教 材 作 成
日本語教育専門員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 概論講義 ・ 図書館見学の随時 ・ 基礎的な分類演習 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 概論講義のための Microsoft Power Point の作成 ・ 「日本の図書館事情」（自主作成教材）作成
司書	<ul style="list-style-type: none"> ・ 業務見学（紹介） ・ 演習 ・ 概論講義の質疑応答 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教材作成における専門内容に関する助言・相談 ・ 作成した教材の専門語彙、内容面でのチェック ・ レファレンス演習問題の作成

これは、専門家と日本語教師の協働を考えるうえで大変参考になる事例だが、協働について考察を深めるためには、両者のやり取りや教室の実際の記述が蓄積されていくことが望まれる。

3. 実践の概要

本稿が記述・分析する外国人生活者向けケアプラン教室は、文化庁平成25年度『生活者としての外国人』のための日本語教育事業「地域日本語教育実践プログラム（A）」に採択された「日本に定住を希望する外国人住民が高齢期に向けて備える「ライフ・プラン」に必要な日本語教育実践プログラム」（企画・運営責任者：結城恵）の一環として行われた。近年、国内に在住する外国人の定住意識の高まりにより、外国人住民にも高齢期への準備が必要となってきている。この準備の支援を目指して企画されたのがこのプログラムである。プログラムは、①健康維持や介護制度の理解を目的とした

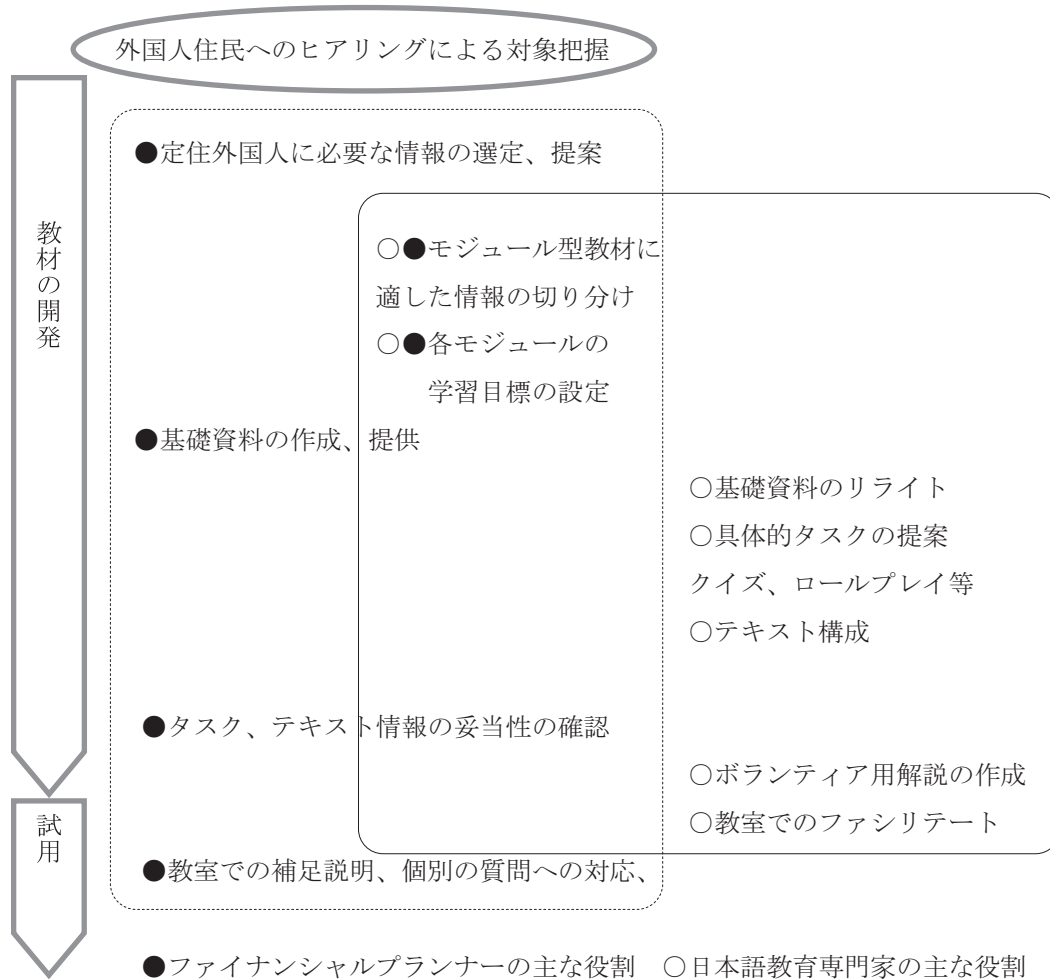


図1 開発の体制とおおまかな流れ（大和・渡部・結城2015）

「ケアプラン」、②税金や年金についての理解を目的とした「マネープラン」、③スポーツを通じて地域住民との交流を図る「地域交流プラン」の3種の教室からなり、いずれも専門家と日本語教師とが協働して企画・教材作成・運営を行った。

このうち、②のマネープランについては、大和・渡部・結城（2015）が教材の開発に焦点を当てて報告している。本稿の目的である専門家と日本語教師との協働についても、この中で簡単に触れられている。前ページの図1は、両者の役割分担をまとめた「開発の体制とおおまかな流れ」である。

図1を見ると、ファイナンシャルプランナーが専門知識の提供、日本語教師がテキストの準備を行い、両者が一緒に行ったのは「モジュール型教材に適した情報の切り分け」「各モジュールの学習目標の設定」であったことがわかる。（なお、大和・渡部・結城（2015）では、両者の具体的なやり取りについては記述・分析していない。）

本稿の分析対象であるケアプランでも、図1とかなり近い体制で教材作成・実施を行っていたが、上記の「情報の切り分け」「学習目標の設定」は専門家が中心に行っており、日本語教師はコメントを述べる程度であった。詳しくは、次節以降で記述する。

4. ケアプラン日本語教室の概要

専門家と日本語教師との協働について分析する前に、ケアプラン日本語教室の全体像を表2に示す。この教室は、2013年11月～2014年2月の間に全12回で行われた。1回の教室は2時間であった。各回の内容の一覧を掲載する。なお、第1回（マネープラン教室と共催で、ライフ・プラン表の作成）、第2回・10回（地域交流教室と共催で、弓道や茶道体験）は、本稿の分析対象とはしないため、掲載していない。

下表のうち、「素材」は、教室で実際に使用した器具や動画、そして、テキストを作成するうえで参照あるいは引用した資料を指す。「活動」は、内容に関するクイズ、動画視聴、ロールプレイ、アクティビティを指す。

表2 ケアプラン日本語教室の全体像

回	タイトル	内 容	素 材	活 動
3	認知症について知る	<ul style="list-style-type: none"> ・認知症の基礎知識を知る ・認知症の人への対応方法を知る 	動画（ドラマ「ばあちゃんの世界」）	<ul style="list-style-type: none"> ・ロールプレイ（認知症のお年寄りとお話す） ・認知症予防の脳トレとしての指体操「ゆびまわし、あとおいたいけん」
4	おじいさん、おばあさんの体験をしよう	<ul style="list-style-type: none"> ・加齢体験キットを使い、高齢者の体験をする ・高齢者体験を通して、介護をする際に気をつけることを知る 	加齢体験セット「もみじ箱」、アイマスク	高齢者体験

回	タイトル	内 容	素 材	活 動
5	脳卒中	<ul style="list-style-type: none"> ・脳卒中の意味や症状を知る ・脳卒中になった際の対処ができるようになる ・(脳卒中の予防ができるようになる) 	動画「アニメでわかる脳梗塞」	<ul style="list-style-type: none"> ・クイズ (日本人の死因) ・ビデオ「脳卒中」 ・電話会話 (救急へ通報する) ・脳梗塞になる可能性チェック (血圧測定、両目をつぶって片足立ち) ・リハビリ体操「パタカラ」
6	生活習慣病	<ul style="list-style-type: none"> ・生活習慣病 (の危険性) について知る ・健康に良い習慣と悪い習慣が分かる 	竜ヶ崎市公式ホームページ生活習慣病チェック	<ul style="list-style-type: none"> ・生活習慣病チェック ・BMIの計算 (各自の身長と体重で計算する)
7	介護について相談する	<ul style="list-style-type: none"> ・介護が必要なとき相談する機関を知る ・地域支援包括センターのことがわかる 	写真 (地域包括支援センター建物)	<ul style="list-style-type: none"> ・クイズ (地域包括支援センターでできること) ・会話: 地域包括支援センターで介護について相談する (職員に家族の脳卒中や認知症の症状を説明する)
8	介護サービス	<ul style="list-style-type: none"> ・介護サービス制度の種類と内容の概要を知る 	桐生市「ともにはぐくむ介護保険」、介護サービスチップ (自作)	<ul style="list-style-type: none"> ・クイズ (介護保険) ・ケアマネージャー体験 (ケアプラン作成)
9	日本語を使って介護の体験をしよう	<ul style="list-style-type: none"> ・福祉用具を触って、使い方を考える ・日本語を話しながら介護の体験をする 	福祉用具 (食器、靴、車いす等)、加齢体験セット「もみじ箱」	<ul style="list-style-type: none"> ・介護に役立つ道具を見て使い方を考える ・介護体験
11	まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでに習った介護に関する用語と内容を確認する 		<ul style="list-style-type: none"> ・すごろく

ケアプラン日本語教室を構成するメンバーは、この教室の主な対象である外国人住民、外国人住民と教材を介して対話するボランティア、日本語教師、専門家である。ボランティアは、募集に応じて集まったもので、日本語教師などによる複数回の研修を受けている。ボランティアの属性は、国際交流に興味のある大学生、この地域の別の日本語教室で活動している主婦や退職者が中心である。上記すべての回において、外国人住民とボランティアを含む2～4グループを形成し、内容についての対話はグループ単位で行った。対話は、内容や活動を盛り込んだテキストに沿って行われた。日本語教師は教室全体のファシリテーターとして教室の開始 (導入) と終了 (まとめ) 時の指示や投げかけを行った。専門家1～4名は、原則的に各グループに1名ずつ入ったが、必要に応じて全体の前で指示や説明を行った。

5. 協働の過程

5. 1 協働の全体的過程

専門家と日本語教師との協働について、その過程を記述し、分析を加えていく。まず、全体的な役割分担を時系列に沿って説明する。

- ①プログラムの企画・実施責任者（結城）の指導に基づき、専門家が7回分の教室の目的（知識の理解）・目標（教室で学ぶことで可能になる行動）・内容（知識）・ワーク（活動）を書面にまとめる。
- ②書面にまとめた内容を専門家がプレゼンし、日本語教師がコメントを付ける。
- ③書面とコメントに基づき、専門家と日本語教師が意見交換したうえで、日本語教師から内容の絞り込みや活動を提案し、活動に用いる素材（動画・器具・体操・パンフレット・web ページなど）の探索を依頼する。
- ④専門家から提供された素材を元に、日本語教師がテキストや補助教材を作成する。
- ⑤作成されたテキスト・補助教材に対して、専門家がコメントを付ける。
- ⑥専門家のコメントを受けて、日本語教師がテキスト・補助教材を修正する。
- ⑦修正されたテキストを用いて、日本語教師がファシリテーターとして教室を実施する。
- ⑧教室での対話において、専門家は、参加者（外国人住民・ボランティア）から出た質問に対して回答したり、テキストの内容について追加の説明を行ったりする。
- ⑨教室後の反省会でお互いにテキストの内容や実施の方法についてコメントを述べる。

上記は大まかに、①～②は企画、③～⑥は教材作成、⑦～⑨が実施の局面にあたる。これを表にしたものが以下である。①～⑨のすべての過程に関わった専門家は2名、日本語教師は2名である。⑦～⑨の教室の実施では、さらに2名の専門家が随時加わっている。

表3 専門家と日本語教師の協働の全体的過程

局面		専門家（介護分野）	日本語教師
企画	①	目的・目標・内容・ワークの案作成	
	②	案のプレゼン	案へのコメント
教材作成	③	意見交換	意見交換 内容の絞り込みや活動の提案 素材の探索要望
	④	素材の情報提供	テキストや補助教材作成
	⑤	テキスト・教材へのコメント	コメントを受けて修正
	⑥		
実施	⑦		ファシリテーターとして実施
	⑧	質問への解答や追加の説明	
	⑨	テキストの内容や実施の方法についてコメント	

表3から、特に、②から⑥の間で、専門家と日本語教師の間で連続して多くのやり取りが生まれていることがわかる。

このうちのいくつかについて、筆者たちがやり取りを行ったメール・配布資料・メモの記述をもとに具体的な様子について記述する。

まず、①～②の段階では、専門家・日本語教師の双方がまだ教室の具体的なイメージを掴めていなかった。そのため、専門家のプレゼンでは、主に教室で学んでほしい知識が提示され、それに一部ワーク（活動）が添えられているというものだった。日本語教師は、それに対して、参加が想定される外国人住民の日本語力の多様さや、1回の教室で集中して知識を学べる時間の限界といった観点から、より平易な日本語で（あるいは、言語に依存しない方法で）、より項目を絞った教室にしていく方向でコメントを述べた。

この段階で、ケアプラン日本語教室は、専門家が単に内容を説明するという講義形式ではなく、動画視聴・体の動き（体操など）・仮想体験・おしゃべりを最大限に取り入れることで、参加者が体験しながら健康・介護に関する知識を得られるものにするという共通理解が両者の間で形成された。

③の段階では、意見交換をもとに、日本語教師が各回の教室について、具体的な活動案（各回について1～5個）とその実現に必要な素材（各回について1～5個）を書面にまとめた。それに基づいて、④では1名の専門家から20を超える素材の具体的な情報（参考となるwebページのアドレスなど）がメール記載の形で提供された。日本語教師は、それに基づいて④で本格的な教材の作成に取り掛かった。⑤の教材への専門家からのコメントは、主にメール上でのものであった。

5. 2 協働の具体的過程

ここではケアプラン日本語教室の第8回を取り上げ、企画・教材作成・実施の各局面を通しての専門家と日本語教師とのやり取り、また、教材内容および実際の教室の様子を記述することで、協働の具体的過程の一例を示す。

企画の段階

専門家から教室の1回分として「介護サービス」の案が出された。以下に案の主要部分を示す。

7 介護保険サービスを知る

目的 介護保険のサービスを理解する。

目標 介護サービスの種類が分かる。

介護サービスを利用するためには、ケアマネージャーにケアプランを作成してもらわなければなりません。

(1) ケアマネージャーとは

(2) 介護保険法において要支援・要介護認定を受けた人からの相談を受け、居宅サービス計画（ケアプラン）を作成し、他の介護サービス事業者との連絡、調整等を取りまとめる者。通称ケアマネジャー。略称ケアマネ。

(3) ケアプラン

＜筆者注：ここに要介護認定→ニーズの把握→ケアプランの作成→介護サービス開始→モニタリング（ケアプランの評価）のフローチャートあり。ここでは省略。＞

(4) ホームヘルパー

(5) デイサービス

(6) デイケア

(7) ショートステイ

ワーク 7

【ケアプランを作ってみよう】

この案はまだアイデアのメモの段階であり、これから肉付けされるべきものである。ただ、活動（資料中では「ワーク」）が1つのみであるため、このままでは用語の説明中心になる可能性もあった。そのため、日本語教師からは、用語の意味が活動の中で理解されるようなデザインが必要であるというコメントを付けた。

教材作成の段階

両者の意見交換の中で、「介護サービスが点数に換算できる」という情報に着目した日本語教師側から、ゲーム形式で進めてはどうかという提案を行った。これは、体の症状など介護サービスの利用者の状況をあらかじめ設定し、参加者がケアマネジャーになったつもりで仮想の介護プランを作成するというものである。参加者は将来、ケアマネジャーとして介護プランを作成することはないが、介護サービスにゲーム形式で親しむことで、サービスの種類や内容、利用の仕方を具体的にイメージしやすいと考えたためである。

これを受け、日本語教師側から介護サービスが一覧になっている資料を素材として要望したところ、専門家側から『ともにはぐくむ介護保険』という市町村発行のパンフレットの提供があった。

素材とした冊子は、「介護保険の仕組み」「保険料の決め方・納め方」「サービス利用の手順（介護保険の利用には申請が必要）」「サービスの種類と費用①②③」「費用の支払い（自己負担割合と負担の軽減）」「地域支援事業（介護が必要とならないように）」「介護保険施設等一覧」「在宅高齢者福祉ガイド（抜粋）」等からなる。専門家と行った打ち合わせの結果、このうち「サービス利用の手順」と「サービスの種類と費用①②③」について扱うことになった。テキスト内の説明部分は、冊子の記述を日本語教師がリライトしたが、情報量が非常に多く、どこを取り出すかに苦勞した。また、「サービスの種類と費用①②③」は、日本語母語話者でも介護の基礎知識がないと理解が困難なもの

であった。そこで、教材では、比較的理解しやすいサービスのみを選び、その名称と特徴づけるイラストおよびごく簡単な説明を掲載するにとどめた。出来上がったテキスト（稿末の資料1を参照）をチェックした専門家からは、「全体的に内容がシンプルになっているので、各コーナーで専門家の解説（説明）が必要。当日は専門家を全テーブルに配置すれば、細かい部分はほとんど口頭説明のできるのだから大丈夫だろう。」というコメントがあった。

実施の段階

このコメントを受け、日本語教室の当日は、参加者6名を2テーブルに分け、各テーブルに1名の専門家と1～2名のボランティアを配置した。参加者の日本語力は初級後半から中級程度であった。また参加者の中には、介護サービスについては既に若干の知識を持っているものもいた。

教室では、日本語教師が冒頭と最後の発表部分のみ進行を担当し、それ以外の進行は各テーブルに任せた。各テーブルでは、ボランティアが主体となりテキストに沿って対話が進められた。

各テーブルに配置された専門家による補足説明では、説明のスピードが速くなる場面が散見された。しかし、大部分の参加者は、日本語や介護についての知識が不十分であっても、専門家やボランティアによる事例の提示や個別説明、参加者同士の母語によるサポートなどによって、テキストの内容や行うべき活動が理解できていた。

その後、参加者は、介護プランを作成する作業に入った。介護プラン作成では、テキスト上で与えられた利用者の症状や状況に応じて、参加者それぞれが介護サービスを選択し、選んだサービスを表すイラスト付きのチップをはさみで切り離す作業を行った。そして、介護チップを白い用紙に糊で貼り、各自の介護プランを全体に見せながら発表するという手順を進めた。ただ、実際には発表とまではいかず、各自が選んだ介護プランの読み上げとなった。

このケアマネ体験では、かなり簡略化した形でサービス内容を紹介したことで、介護サービスの大きなイメージを持ってもらうことはできたと感じられた。一方で、教室後に参加者から記入してもらったコメントを見ると、「ケアマネ体験が難しかった」という声が複数上がっていた。介護サービスの種類や利用の仕方は、日本人でも予備知識がなければ十分な理解が難しいものと思われるため、このような反応はある程度予想されたものであるが、活動の選択や内容の絞り込みなど、さらに改善の余地があると感じられた。

6. 考 察

本稿では、筆者たちが実施した「定住を希望する外国人生活者向けケアプラン日本語教室」について、専門家と日本語教師の協働という観点から記述・分析を行ってきた。前節の分析から、今回の実践では、いくつかの役割については、日本語教師が行うことは難しく、専門家に関わる効果が発揮されたと言える。表4に、各局面別に専門家の存在が効果的だった役割と、その具体的な効果を示す。

表4 専門家の役割とその効果

局面	専門家の役割	その効果
企画	目的・目標・内容・ワークの案作成	専門家の問題意識による設定
教材作成	素材の情報提供	知識・経験による探索範囲の広さ・適切さ
実施	質問への解答や追加の説明	テキストに不足する点の補足 参加者の要求の充足

上記の役割は、仮に日本語教師が行った場合、知識や経験の不十分さから、内容面での不適切さを招く可能性が高かったと考えられる。

一方で、いくつかの役割は、専門家にはハードルが高く、日本語教師の専門性が力を発揮した。表5に、日本語教師の参加が効果的だった役割と具体的な効果を示す。

表5 日本語教師の役割とその効果

局面	日本語教師の役割	その効果
教材作成	内容の絞り込みや活動の提案	学習者の日本語レベルの想定容易さ
	テキストや補助教材作成	学習者の日本語レベルに応じた記述やレイアウト
実施	ファシリテーターとして実施	一方的な知識伝達スタイルへの歯止め

上記の役割は、仮に専門家に任せただけの場合、内容の難易度の上昇や、言語による説明への偏りが予想される。

この実践で取り扱った健康維持や介護は、防災やゴミといった話題よりもさらに専門的な知識が必要とされる話題であったが、同様の専門的知識を取り扱う実践が行われる場合には、上記の役割分担は1つのモデルとなりうる。

本稿では、健康維持や介護といった専門的な知識の提供・共有を目指した教室を行う場合の専門家と日本語教師の役割分担の在り方について考察を加えた。今後、同種の実践についても、役割分担を含む記述が蓄積されることで、地域の日本語教育の内容と方法が発展していくことが望まれよう。

参考文献

- 大島弥生 (2004) 「専門科目の教員と言語の教員とのチーム・ティーチングの中での指導と助言」『日本語学』24(1)、pp.26-35、明治書院
- 亀井元子・浜口美由紀 (2007) 「司書と日本語教育専門員との協働による海外の司書のための専門日本語教育—「図書館事情」における実践報告」『国際交流基金日本語教育紀要』3、pp.169-182、国際交流基金
- 北村祐人 (2014) 「日本語教育が地域に貢献できること—豊田市と名古屋大学の連携を参考に—」『JaNet』70、pp.1-2、スリーエーネットワーク


五味政信（1996）「専門日本語教育におけるチームティーチング—科学技術日本語教育での日本語教員と専門科目教員による協同の試み—」『日本語教育』89、pp.1-12、日本語教育学会

大和啓子・渡部真由美・結城恵（2015）「定住を希望する外国人生活者向けマネープラン教材の開発と試用」『群馬大学国際教育・研究センター論集』14、pp.37-51、群馬大学国際教育・研究センター

資料（テキストの一部）

<かいごサービスの しゅるい>


※ケアマネージャーたいけんをする まえに かんたんに サービスの ないようを かくにんしましょう。

①いえに きてもらう 

ニホームヘルパー、かいごし、かんごし が いえに きます。

◎ほうもんかいご 


◎ほうもんかんご 


◎ほうもんリハビリテーション 


◎ほうもんにゅうよくかいご（うちで おふろにはいる）



など

②しせつに かよって うける 

◎デイサービス（つうしょかいご） 

◎にんちしょう（認知症）たいおうがた つうしょかいご 

◎デイケア（つうしょりハビリテーション）



③たんきかん しせつに とまる



◎ショートステイ

= 1~30 にちまで りようできる。



しょくじ（ごはん）・にゅうよく（おふろ）の かいごなど

④せいかつする かんきょうを ととのえる

◎かいごに ひつような もの（つえ、くるまいす、ベッドなど）を かりる



◎かいごに ひつようなもの（こしかけべんぎ（トイレ）、にゅうよくよう（おふろ）いす・ベルト など）を かう



◎かいごのために いえを かいしゅう（しゅうり）する

（かいだんに てすりを つける



⇒



わしきトイレ から ようしきトイレに かえる



Cooperation between Specialist in Various Fields and Japanese
Language Teacher in Japanese Language Education in Community:
A Case Study in the “Nursing Care Japanese Class” for Foreigners
Wanting to Settle in Japan

TAWARAYAMA Yuji, WATANABE Mayumi, YUKI Megumi

Lately, in community based Japanese Language classrooms, information is often prepared and shared with foreigners by way of collaborations between specialists in various fields and Japanese language teachers. However, these professional endeavors are not well documented. Therefore, detailed description is not available, which makes the collaborations difficult to study. This paper analyzes and describes “nursing care Japanese classes” that we conducted for foreigners who wanting to settle in Japan. This study is about the cooperation between specialists from various fields and Japanese language teachers. The study examines the effective division of roles in three phases: planning, creating teaching materials, and conducting the actual classes.